概　要　報　告

実施期日	令和７年８月５日(火)
部　会　名	小学校　国語部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『子どもの「伝えたい」を引き出す授業づくり～国語科における協働的な学びを通して～』

提案概要

１．実施学年・単元名・単元目標

第２学年・「スーホの白い馬」（光村図書２年・下）

①本文中の語句を手掛かりにしながら、場面の様子や出来事をとらえることができる。(知識及び技能)

②場面の様子に着目して、登場人物の心情を想像することができる。（思考力・判断力・表現力等）

③本文を読んで感じたことや分かったことを進んで共有し、学習課題に沿って、感想を伝え合おうとしている。（学びに向かう力・人間性等）

２．児童の実態、育成したい資質・能力

本単元に入るまでに、国語の物語教材で「音読劇」「なりきり日記」「初発の感想から問いをつくる」等の様々な実践を行ってきたが、「伝えたい」という気持ちをもって発言する児童は限られてしまっていた。そこで、本単元では、多くの児童が「伝えたい」気持ちをもてるようにし、話す力を育成したいと考えた。児童が選択肢の中から考えて選ぶ「Which型授業」や、考えのズレを生み出す仕掛けを単元計画の中に取り入れて、他者に伝えることの必然性をもたせたいと考えた。

３．課題に対する手立て

【視点①　考えをもつための工夫】

・会話カード･･･スーホと白馬の会話を書く活動を通して、人物の気持ちの読み取りをした。本文に線を引いて根拠となる叙述に着目させるようにした。

【視点②　考えを深めるための工夫】

・初発の感想をきっかけにする･･･児童の関心が集まった場面を中心に会話カードを作成した。

・言葉の置き換え･･･（例）「はねおきて」→「ゆっくりおきて」、「歯をくいしばり」→「にこにこしながら」等言葉を置き換えて着目させ、その言葉の意味や使われている理由について考えを深めながら、場面の様子を捉えられるようにした。

・ズレを生み出す発問を設定･･･「白馬はしあわせだった」「白馬はしあわせではなかった」という選択肢を設定して児童に問いかけた。自分の考えを伝えたり友だちの考えを聞いたりする主体的な姿を引き出せるようにした。

４．成果・課題

会話カードを用いたことで、会話の中に自分の考えを反映することができ、人に話すように文章を書くことができた。作文より取組みやすく、文章を書くことが苦手な児童にとって有効であった。読み取りへの意欲につながった一方で、深めた内容が会話文では表しにくく、不十分と感じた箇所もあった。言葉の置き換えの活動では、動作化を取り入れたりする児童も見られ、言葉の意味や場面の様子を詳しく読み取ることにつながった。

単元の後半ではズレが生まれる発問を作り、自分の立場が明らかになることで「伝えたい」気持ちが生まれ、多くの児童が積極的に考えを伝えることができた。どちらの立場からも、自信をもって伝える様子が見られた。話し合いが進むと、“白馬は「しあわせだった」か「しあわせでなかった」か、

どちらか一方ではなく、どちらの要素もある”ということに気づく児童があらわれた。また、その割合がどれくらいかを伝えるために、身体を使って表す児童が見られ、その表現の仕方が他の児童にも広がっていった。他者の考えに触れ、自分の考えとのズレに気づくことが、自分の考えを見つめ直し、対話的に深めていく姿勢につながった。

一方で、学級の中には、考えはもっていても言葉にすることが難しい児童がいたり、友だちの発言につられてしまう児童が見受けられたりした。児童が自分自身の考えをさらに深めていくためには、日常的に話し合う練習を重ね、言葉を使う力を高めていくことが大切であるとわかった。

協議の柱及び協議概要

参加者それぞれの考えやこれまでの実践を付箋に記入した後、グループで協議を行った。二つの協議の柱について、以下のように様々な意見が出された。

【協議の柱①　「伝えたい」を引き出すための工夫】

・相手の考えを否定せず認め合う、安心できる学級の雰囲気や環境作りをする。
・教師の共感的な態度や、机間巡視による評価で自信をもたせる。
・相手意識、目的意識をもたせる。
・考えを形成する時間を十分に確保する。
・児童自身に「問い」を考えさせたり、学習の中で児童から生まれた「問い」を扱ったりする。
・生活体験に即し、身近に感じられる課題を設定する。
・「自分だったら」「反対の立場だったら」と視点を置き換えて考える。
・ICTを活用するなどして伝える手段を選ばせ、発言が苦手な児童も取り組めるようにする。
・視覚化（グラフ、色分け、対比等）して自分自身や友だちの考えを捉えやすくする。
・相手の考えと自分の考えを比べながら聞く姿勢を身に付けること等、聞き手側の指導を継続する。

【協議の柱②　教材の読み取りの場面で、読みを深めるための工夫】

・本文に線を引いたり、書き込みをしたりして、行動、会話、心情、情景描写、筆者の考えなどに着目させる。
・発問→発言→問い返しの流れを作り、さらに深く読むことにつなげる。
・挿絵がどの場面と対応しているか考える等、挿絵を効果的に使う。
・動作化や音読劇などの身体表現を通して、読み取ったことを表す活動をする。
・場面と場面を比較したり結びつけたりして、その変化を読み取ることを意識する。
・一人読み、役割読み、一斉読みなど、場面や目的によって読み方を使い分ける。
・考えの根拠がどこにあるか、文章から探し確かめる。
・叙述の他に、本文に書かれていない行間から想像した部分も大切にする。
・物語が描かれている時代や背景を調べる。
・なぜその表現が使われているのか、語句の意味や効果、筆者の意図を考える。
・以前の単元で扱った既習事項と関連づけながら読む。
・答えが一つに絞られず多面的、多角的に考えられるような課題を設定する。

まとめ概要

本日の協議会では、地域・校種・学年が違う先生が集まっていたことで、自分の考えを話したり相手の考えを聞いたりする主体的に「伝え合う」場ができていた。伝える活動のためには、聞き手側が「共感する」「否定しない」「認め合う」なども大切な要素である。提案のように、「ズレ」を生かした授業づくりは、児童にとって有効な手段である。教師が「ズレ」を引き出すための工夫を考えることが、児童の深い学びにつながっていく。